

---

# 出席番号一番の恋

あやひこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

出席番号一番の恋

### 【Nコード】

N3672B

### 【作者名】

あやひこ

### 【あらすじ】

春出会った出席番号一番の男のせいで私の学園生活はメチャメチャだよ！こうなったらもうやるしかないね！！

## 1 限目：1 番の男

「井上、」

「はい。」

春、私は高校二年生になった。二年生にもなると進学クラスやいろいろ分かれるわけで、いちお理系クラス入り。

担任の守茂先生は出席を取りはじめている。もりしげ

回りは見知らぬ顔ばかり。一年生の時同じクラスだった人はえーつと、三人かあー。

「加地、」

あつ、これ私。

「はいっ、」

至ってまじめな女の子なんです。

あー喉かわいた。友達もいないクラスだから疲れるよ。  
ガコンツ

はーうめえ。

私はまず昼休みジュースを買い、飲み干していた。

「まじ？」

ビクウーッ!!

背の高い痩せた感じの男の子。

誰だか知らないけどそんな私の空き缶をみて一言。シカトシタスタと教室に帰った。

教室内はとてもにぎやかではやく私も友達がほしい感じた。

「よう、どうよ？」

ロッカーに教科書とりに行くと小・中・高と一緒に日高に話かけられる。こいつもこのクラスなんだ。

「どうよって、まだわかんないよ。」

「ふーん」

これ以上話すのが恐くてさっさと席に戻った。私はつまらない人間。そう思われるのが恐いんだ。

もともと私は友達が少ないし、親友と呼べる人物に出会った事もない。だから安易に話かけたりもしない。

「あつー気のみ女。」

は？声の方を向くとさっきの自販機にいた男が。

同じクラス？げえー最悪。

「あ、どうも。」

ここでも私は会話を遮断するように会釈をし、席に着いた。すると奴は斜め前に座る。

、、朝出席をとった時は後ろ姿しか見えなかった。

出席番号一番の男は奴、井上だった。

「ねーさっき日高としゃべってたね？」

振り向きさらに会話が続く。

「あーおな中だから。」

「おな中って、もつと女らしい言葉使えよ。同じ中学ってよ。」

「あつすいません。」

すぐにチャイムが鳴り守茂先生がやってきた。男の子ってわからない。なんで私なんかに声かけるんだろう？

はーやっと長い一日がおわったよ。帰ろう。

「加地俺のかばんとってー」

きたよ。あいつだよ。井上だよ。

私は井上の机にぶらさがっているかばんをとると、教室の後ろのドアから今にも出ていきそうな井上めがけてかばんを放り投げた。

「おわっあぶねーな、おめーほんとに女か?!」

いちお井上はキャッチ成功。捨て台詞を吐き消えていった。私も帰ろう。

私は高校まで自転車で通っている。片道30分の道のりを。

「帰るの？俺も。途中まで一緒にいい？」

日高、、私疲れてんの、知らない人と接しすぎて、、。なんて本音は言えずもう少し疲れるはめに。

「健ちゃんが続いてんの？」

キタよ疲れる話題。

「別れた。」

「へー。どこまでやった？」

なぜ特に仲良くもない私にそこまでつつこんだ質問を？それはエッチとみなしてよいのですか？、、すべて。」

「まじ！おまえ大人だな！おれまだ。」

「、、日高彼女いたの？」「いつこ下なんだけどいいよね。恋愛っていいよね。」

「あーまあ。」

「おまえら中3でくつついただろ？俺おまえらがラブラブなところみたら羨ましくてさ。ようやく彼女出来たから大切にしたいんだ。」

「へー彼女さん大事にしてるんだ。へー。」

「まあね。」

と自慢げな顔をしている日高がちよつと笑えた。

「でもやっぱり健全な男なんでやはり一緒にいてもアノ事ばかり考えてしまうんですよ。」

「っーかいつこ下って最近まで中学生だったんじゃない！」

「そうなんですよ。だからあなたに聞いてるんじゃないですか。」

「なるほどね。もしかして昼のどーよも健ちゃんとの事聞いてた？」

「まあね。まー初日じゃあんな答えになるわな。」

この人奥が深いよ。

自宅に近い十字路で日高と別れた。案外話すといい奴なんだね、あいつ。

## 2 限目：非難の目

朝から私本当に大変なんです。ええ、そりゃもう早起きなんて当たり前。

「行つてきまーす!」

愛車に乗り込みいざ出陣! つてもチャリですが。

「おつす!」

「、、、、。」

「あら日高君、久しぶりねえ。いい男になっちゃつてえ。」

はい、小学校から一緒でしたら母もご存じですから。

「いついつてきます。」

「おばさん俺ら同じクラスなんですよ。じゃあ。」

素敵な笑顔であいつ愛想ふりまいてやがる。うちの親に、、。

「ちよつと、待ってよー!」

「おはよ、日高。」

「あつおはよう。」

かくして毎日の登下校の相手が出来た。

「友達出来た?」

「まさか、私だよ? 簡単には出来ないよ。」

「あつああー。なんでもいいじゃん。知り合ったら楽しいんじゃないの?」

まあまあこいつも私の事わかってんだね。

人見知り激しいって。

「出来たの?」

「まあね。」

こいつは昔から愛想いいからなあ。

「加地。」

「私?! っーか昔から友達じゃないの?」

「ははっそうだね。」

やっぱ加地のそういうトコいいよね。」  
「一体なにがしたいんだ？あいつは？」

「加地あいつと付き合ってたの？」

きたよ、あいつだよ。井上。席ついて早々これ。

「つーか私パシリじゃないから。」

昨日の一件実はムカついている。

「あつすいません。」

でも私かわったなあ、今までなら男と話すのも緊張だったのにな。

「で？」

「気になるの？」

ちよつと意外という顔をし井上は続ける。

「昨日見たから、あいつ他の女と、。だからさ、そういう事は、」  
「」

おかしい。男ってわからない。こいつも。

「あはははー！」

この笑いで教室中の奴らに一瞬注目されるがもう別にいいや。

「できてないから別に気にしなくていいんだよ？」

なんだかわからないというような表情。

まあでもお節介だったって気がついたみたいでそうと言うと席に着き教科書をだしはじめた。

授業中一切の紙が回ってきた。

『加地さんって井上君と仲いいよね。知り合いなの？』  
「、、、、、、」

一体誰が、、。キョロキョロしているところそり手をあげこちらをみてアピールしてる子がいた。

休み時間にとりあえず話に行こうと思った。

「あのメモそう？

私あの人と話すのこのクラスになってからだから大丈夫だよ。」

「あっあー。」

とたんにその子は泣きだし私はクラスから非難の目で見られるようになった。

なんで？悪い事した？

それだけが一日中ぐるぐる頭の中で駆け巡っていた。

### 3 限目：仕返し

あまりにも理不尽極まりない出来事すぎてむしろこっちが泣きたい。  
「何したの、スケ番。」

きたし。やっぱり井上。人の不幸は蜜の味だからすっげー楽しそうな顔して聞いてきたし。

「別に。スケ番って根拠は？」

いつも以上に冷ややかな態度の私に事の重大性にきずいたらしく井上はややはにかんだ笑顔をしてきた。

「泣かしたんでしょ？」

ああこいつまじで嫌い。なんでこんな突っ込んだこといつも、、、。  
「、、、おまえ、優しくしてやれよあの女に。」

「は？なんで？名前も知らないんだぜ？」

なんかアホらしい。私なんか巻き込まただけじゃん。あの女は井上の事好きなんでしょ結局は。なんで泣いたかは知らないけど。

「女って恐いね。」

日高は真剣な顔で言う。

「なんで？」

チャリに鍵を差し込みながら聞き返した。

「俺さいつも彼女と放課後バス来るまでバス停にいるんだけどさ。」

「うん。」

「クラスの子がね近くにいてさ、」

「、、わかったからもういい。」

「あっきづいてくれた？」

「パンクわざと？」

私のチャリは見事にパンクさせられていた。

「女って恐いね。」

日高はアノ事知ってるのかな？暇さえあれば彼女さんのトコ行ってるんだから知らないか。

「乗せてくれる？」

「がつてんだ！」

三十分というながい道のりを日高は完走した。私を乗せて。

「ありがとね。あつ明日は私バス乗り継いで行くからさ。」

「おう！おまえ負けんなよ！」

小刻みに息があがつてる日高。ちよつとよろめきながら帰っていった。

私は早速電話を掛けていた。あの自転車を買った店、健の実家に。

「おじさんごめんねえ。急で。」

私は一時間後自転車屋さんにいた。ここはなつかしい匂いのする場所だ。なんてつたつて初めて付き合った人の実家なんだから。

「はいっ。これでよし！乗って帰りな。」

でも健のおじさん変わらないなあ。またタバコふかしてるよ。あつでも少しやせた？

「ありがとね。」

健居ないのかな？

キョロキョロする私を見ておじさんは

「健か？今バイトじゃねーか？」

私ははっとした。なんで健の事探してたんだろ？もつうちらは終わったのに、。

次の日教室に入るとあの女のまわりに四・五人いて私を見てニヤニヤしている。

はつきり言って頭にきている。ただほとぼりを冷めるのを待つなんて馬鹿馬鹿しい。おまえらの挑戦受けて立つ！！

「井上、おはよう！」

びっくりして振り向く井上。優しくほほ笑み私は席に着いた。

「おーはよー。」

私は見逃さない。やや赤らめた表情に井上がなつた事を。

#### 4 限目：疲労

私は決めた。あいつらの挑戦にいどむと共に勝つ事を！！まさかこんな生活が待ってるなんて思いもしなかった。普通に友達が出来て普通に勉強して三年生になるんだって思ってた。

「井上、宿題やってきた？」

「半分くらいやったなあ、どうせ指されないし。」

「私の指されるトコやってる？」コラへんなんだけど、

「待て待て、あっやってねーよ。」

「ええっ私数学苦手なのに、。」

「じゃーねえなあ、教えてやるよ。」

「やったー、なんか数学得意そうだもんね、井上。」

「っーか理系のくせになんで数学苦手なんだよ、」

、、嫌いな奴でも話せばわかりあえるんだなあ。ってかあいつら今の見てたよな？恐くて見れないけど、、。

「おっはーお二人さん。なんだね朝からここは熱いなあ。」

こいつはほんとにノー天気だな。

「なに？日高彼女とやったの？」

「、、おめー乗っけて帰ったのにいつやるすぎが？」

「なに、やるって？乗っけてって？おまえら楽しそうじゃん。」

さぞかしあいつらの目には楽しそうにうつってんだろうな、うちらさぞかし傷ついただろうなあ。でもまだまだやめねーよ。1対大勢なんてむかつくんだよ。

「井上弁当持ってきた？私作りすぎちゃってさ、食べきないんだけど。」

「なら持つて来んなよ、まあ俺がいたからいいものを。」

うれしそうじゃん。なんとなくわかってたんだ、持つてこないの。いつもパンとか食ってたし。

私はこうしてしたたかに彼女たちを苦しめていった。井上が好きな井上と接する機会を与えないという作戦で。

彼女たちの陰湿な嫌がらせを受けてもなお立ち向かっていけたのはやはり、

「あー俺まじでやばい。あーあー加地どうしたらちゅーできる?!」  
こいつ日高との登下校があつたからだと思う。

「しらねーよ、自然にまかせろよ。」

このノー天気な会話が私の動力原だったのかなって思うよ。

「あーありがとね。」

えっ?と言うような表情をして日高が見ていた。

でも私はきずかないふりしていた。もうそろそろ私嫌がらせがえしするのやめようかな。なんか虚しいよね、こんな事。ねえ日高もそう思わない?

そんなある日やはりとでも言うべきか、

「好きだ。」

井上からの告白。

こんなめんどくさい事になるならいつそ誰とも話さなければよかった。

嫌がらせがえしを続けるには井上との関係を壊すわけにはいかない。告白の返事をすれば井上との関係はこのままではいられないだろう。どうしたらいいのか本当にわからない。助けて!!

## 5 限目：それが終わり

「おまえはどうしたいんだよ？」

いつもとは違う雰囲気と俺とこいつの間を流れている。思えば長い道のりだった。

「好きって言われても何とも思っていないし、。」

この身なりからは想像もつかないはつきりした性格。俺がこの3年間恋してる女。

「日高はこの関係が崩れてもいいの？」

そもそも健と別れたって聞いた時から俺の行動ははじまっていた。一年の頃から井上が好きだった女と二年になって席が隣になった。

『あの二人できてるっぽくねえ？』

授業中その女は行動を起こした。どうやら加地に手紙回したらしい。俺井上から付き合ってるって聞いたぜ。」

これ極め付け。

耐え切れず加地の登場に涙してたっけな。まあその後は俺の思いどおりになったけど。

「別に、。俺は、おまえといればそれで、。」

「はあ？」

いじめにあえば俺が助けてやってるうちに俺の事少しずつ好きになってもらえたら、。って思ってた。いざ接近するともっとちかよりにたくなつてわざとパンクさせた。もちろんクラスの女のせいにして。

「だって日高、彼女いるじゃん、！！見たことない！でもうそっ！」

また俺たちのまわりを今まで経験した事のない空気が漂っている。

加地はなにか考えているのか一点を見つめている。

もうそろそろ告白の時なんだろうか？もう少しいい友達を演じていべきなんだろうか？俺も次のことばが出せずにいた。

「日高、ゝ、ゝ」

初めに口を開いたのは加地だった。

「私は普通に日高と恋愛したかった。」

加地はもういない。俺と話す事も一緒に帰る事もない。俺はふられたんだ。俺はふられたんだ。

私ってなんなんだろう。嫌がらせも井上も日高も全部私が悪いんじゃない。

ごめんね、ごめんなさい。

私はほんの少し井上が好きだったよ。

私はホントに日高に惹かれていたよ。

でも私は逃げたい。ねえ、逃げてもいい？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3672b/>

---

出席番号一番の恋

2010年10月28日03時10分発行